

補佐官ノート

利用者参加が特徴であるWeb2.0時代の典型的コンテンツの一つとして、食べログや価格.comに代表されるレストランや様々な製品の評判を集めた比較サイトがある。膨大な利用者から提供される情報を体系的に整理し、比較可能な情報として再提供することにより、サイトそのものの情報価値を高める。各利用者が提供する情報を、どのようにコンテンツに反映するのかは、各サイトのノウハウにより差別化を図るところであるのは言うまでもない。

わたしは、安くて美味しいものを食べるのが大好きだ。どこの店に行こうかと悩んでいる時には、レストラン評判サイトは便利だ。サイト毎に色々な評価方法を採用しており、内容の信憑性を高める努力もしている。しかし、サイトを活用して選んだ店に訪れれば、自分自身の五感を最大限働かして、料理を味わう。この時には、自分の感覚が全てであり、評価者の言葉が入り込む隙間はわずかだ。当然、高得点店を訪れてガッカリしたり、低評価店で驚きを得たり、サイトの評価とは一致しない自分を発見することもあるのは当然だ。評価サイトで書かれていることを、どれだけ丹念に読んでみても、やはり自身で店を訪れ、饗される料理を食べることで理解することには勝てない。まさに「百聞は一見にしかず」の典型だ。

一方で、料理についての知識を増やし、調理法や素材などについての理解力を増やすと、料理に込められた思いや考えが見えることもある。他者の評価も違った目で見ることができるようにもなる。さらには、料理を自身で作るようになり、料理という体験を得ることで、より深い理解力を持つこともある。

本当に料理やレストランは奥深い。

実は、情報セキュリティ管理やリスク管理でも、「百聞は一見にしかず」という感覚を持ち続けることはとても大切だ。関係者やスタッフから聞こえてくること、他人から伝えられる評判だけで、色々なことを判断すると誤ることがある。取り扱っている現場を見ずして、対応方策や管理の方向性を判断することは危険な行為の典型だ。情報セキュリティの管理者であれば、実態を自分の目で見て、状況を自分自身で調べ、主体的に判断することが必要なのだ。そのためには、情報セキュリティ管理やリスク管理に携わる人間は、フットワーク軽く現場に訪れることも大切だし、関係者から話を上手に聞き出すインタビュー能力も求められるだろう。また、事実を探求するための食欲なまでのデータを得る努力も惜しんではいけない。

また、学ぶことによって深い理解を得る点も、料理とよく似ている。確かに、情報セキュリティが扱う要素は多岐にわたる。それらを自分自身が全て取扱い、理解するのは大変だ。しかし、その前提となる基礎知識というものはあり、その知識を持ってなければ分からないことも多い。確かに、世の中の評判を調べてみたり、あるいは、識者の声に耳を傾けたりすることも出てくるだろう。世の評判や他者の声を正しく理解するには、少なくとも自分に知識がなければ無理な話だ。

このように、自分の主体的、かつ、合理的な理解を得るために、食欲なまでの行動が必要なのだ。状況を理解する力、「百聞は一見にしかず」の姿勢、そして合理的な理解をする努力。これらをバランス良く持つ管理者が求められている。

(山口 英 内閣官房情報セキュリティ補佐官)

<バックナンバー・配信先変更・配信中止>

本メールマガジンにおけるバックナンバーの取得及び配信先の変更、配信の中止等は下記の URL から可能です。

<http://www.nisc.go.jp/nisc-news/>

<御意見、御感想>

<http://www.nisc.go.jp/mail.html>